

第1節 小学校教育につなぐ（小学校教育との連携・接続）

幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

【幼稚園教育要領 第1章 第3 5（2）】

幼稚園と小学校における生活の変化に、幼児が対応できるようになっていくことも学びの一つとして捉え、教師は適切な指導を行うことが必要である。

幼児の発達と学びの連続性を確保するためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼稚園と小学校の教師が幼児の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。すなわち、幼児の発達を長期的な視点で捉え、互いの教育内容や指導方法の違いや共通点について理解を深められるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究会や研修会、保育参観や授業参観などの連携を図るようにすることが求められている。

ここでは、幼児と児童の交流活動を含め、園や学校での体制等の実践事例を紹介する。
（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）
P109～P113）

1 園における取組

本園はA小学校と隣接し、幼児は毎日校庭の一部を歩いて幼稚園に登園している。小学生の生活する姿を見ながら生活しているので、幼児は小学校に親近感をもっている。幼児・児童間の交流では以下の表の活動を行っている。また、日頃から校庭等を使用して、散歩や校庭めぐり、運動会やその練習を行ったり、「親子プレイデー」で体育館を使用したりするなど、小学校の施設を共有している。また、幼稚園の運動会に小学校のマーチングバンドが参加する機会も設定している。

2 年間指導計画

本園の幼児はA校ではなく他の小学校に入学する幼児もいる。他校へ入学する幼児にとっては、交流の機会が「小学校ってこういうもの」という大きな理解となり、「自分の入学する学校はどんなところだろう？」という楽しみにもつながる。また、交流する小学校へ入学する幼児にとっては、これからここに仲間入りするのだという気持ちをもって経験することで、進学への思いをさらに高めることができる。双方ともに、入学前の期待を高め「学校が楽しみ」と実感できる大きな役割をもっている。

また、交流の機会は幼児や教師の学びの場となるだけではない。幼児の姿や小学生との関わり・活動を具体的に伝えることで、幼児の保護者にとっても、学校への安心感を持ち、就学に対する心構えや幼児の今の育ちを確かめ合っていく機会ともなっている。

＜幼児・児童間の交流＞

実施月	活 動	交流学年
10月	生活科「たのしいあきいっぱい」公園へのどんぐり拾い (2時限)	5歳児・1年生
11月	学校まつり	5歳児・1～6年生
11月	生活科「どんぐりまつり」(2時限)	5歳児・1年生
11月	給食体験	5歳児・5年生
2月	授業参観	5歳児・1年生
通年	図書委員による読み聞かせ(年間7回)	4・5歳児・図書委員
通年	学校タイムに参加(縦割り活動・年間11回中9回参加)	5歳児・1～6年生

＜教師間の連携＞

5月	顔合わせ・年間計画について話し合い	幼稚園全職員・1年担任・担当職員
6月	1年生の授業参観・話し合い	昨年度年長組担任・1年担任
10月	公園下見・打ち合わせ	5歳児担任・1年担任・保育所担任
1月	幼小連絡会	5歳児担任・担当職員

交流・連携に当たっては、教師間の話し合いが重要である。定期的に行っているものとしては上記のものがある他、交流の前後で必要に応じて打ち合わせを行っている。

3 活動の展開と評価

(1) 事例1 1年生とどんぐり拾いに行こう！どんぐりまつりを楽しもう！

○幼稚園のねらい・内容

[5歳児]「1年生とどんぐり拾い」

(ねらい)

- ・身近な自然に親しみ、触れ合う中で、様々な事象に興味や関心を持つ。

(内容)

- ・秋の自然に触れながら散策し、どんぐり拾いを楽しむ。

※幼小交流のねらい

- ・1年生と一緒に活動する楽しさを味わい、小学校生活への期待感をもつ。

○小学校の目標

[1学年] 「たのしいあきいっぱい」(生活科)

(生活科の目標)

- ・諸感覚を使って、身近な秋の自然を観察したり、木の実を集めたり、自然を利用して遊んだりするなど、秋の自然に関心をもって秋と関わる中で、夏の頃と様子が変わっていることに気付くことができる。

※幼小交流のねらい

- ・幼稚園の幼児との触れ合いを通じて、下級生との関わりを楽しみ、思いやりの心を育む。

[事前打ち合わせ]

小学校の1学年の担任教師と幼稚園と保育所の5歳児担任が集まり、当日のめあてや日程を確認した上で、公園へ下見に行く。

現地で安全面を確認するとともに、散策ルートや約束を決める。また、幼児・児童の予想される行動を伝え合い、配慮事項について確認する。

[事前準備・活動]

1学年担任は、幼児教育施設からの情報をもとに、グループ編成を行う。

1年生は、同じグループの幼児のために、ワッペンを作る。

[実践]

○どんぐり拾い

小学校の校庭に1年生と幼稚園児・保育所児が集まり、それぞれの先生の紹介・グループ顔合わせを行う。次にめあての「仲良く安全に歩こう。どんぐりをたくさん拾おう。」を聞く。

予め決めていたペアになり、1年生が用意したワッペンを幼児に付け、手をつないで公園へ出発する。

歩きながら、「担任の〇〇先生はね・・・。」と児童から学校の様子を話したり「好きな食べ物なあに？」などと幼児から聞いたりする姿が見られる。

公園では、どんぐりや落ち葉をペアで一緒に拾う。2人で一緒に足を進める姿や、見つけたどんぐりに向かって急に走り出す幼児の動きに合わせて、1年生が走る姿などがある。また、拾ったどんぐりの多さや見つけた虫などを、教師たちにも見せたい思いから、幼児は積極的に教師に関わっている。

学校に戻り、めあての確認をした上で、次の活動は「どんぐりまつり」であることを聞き、解散する。

「どんぐりまつり」では、1年生が、グループでお店やゲームコーナーを開き、幼児を招待する。その準備のため、拾ってきたどんぐりで、おもちゃや飾りなどを作る。

○どんぐりまつり

「どんぐりまつり」当日、幼児が小学校へ行くと、児童から「〇〇くん！」と幼児に声を掛けたり、幼児からお世話になった1年生に手を振ったりと、再会を喜ぶ姿がある。

1年生3クラスを全て回ることができるよう、時間を区切ってそれぞれの遊びを楽しむ。1年生がルール説明をしたり並ばせたりすることを、幼児がよく聞き、行動する姿が見られる。自分の好みのコーナーでは、何度も繰り返して楽しむ姿もあった。

やじろべえやけん玉など、少しコツが必要な遊びで幼児が試行錯誤している姿が

あると、「こうやるんだよ。」と1年生がやって見せるなどして教えている。

終わりの集まりでは、幼稚園・保育所の代表の幼児が、楽しかったことやお礼の気持ちを伝える。代表の幼児は、多くの児童や幼児の前で少し緊張しながらも大きな声で話し、クラスの幼児は代表の幼児が前で話すことを笑顔でうなずきながら聞いている。

○事例1に対する評価

<ねらいや内容の妥当性について>

[5歳児]

幼児は、公園で1年生と手をつないで散歩したり、自然との関わりをもちながら一緒にどんぐり拾いをしたりする姿、小学生の話をよく聞いている姿等から、小学生と関わることを楽しんでおり、ねらいを達成していると考えられる。また、1年生と一緒に活動することで、どんぐり拾いそのものへの意欲の持続が感じられた。

また、1年生が作ったワッペンを幼児に付けたことで、幼児は安心感や1年生への親しみ、活動への期待感をもって散歩をスタートすることができた。幼児は児童と一緒に過ごす中で、1年生への親しみや憧れの気持ちを高めている様子が見られた。

さらに小学校での楽しい活動を経験し、「小学校は楽しい！」と、入学への期待を高めることができた。

[1学年]

児童は、以前に公園に来た頃と自然の様子が違うことに気付き、秋の姿を知ったり感じたりしている。年下の幼児と接することで、相手の姿に気付き足並みを合わせ、どんぐりを入れた袋を縛る手伝いをしたりするなど、思いやりの気持ちが見られた。また、自分たちよりも幼い相手に接することで、どうすれば自分の思いが伝わるかを考えながら、話したり行動したりできたと考える。

幼稚園でこの経験をした児童は、自分たちが幼児を迎えたときに活動そのものをイメージできるとともに、1年生と関わった経験から自分がすべきことが分かり、幼児との関わりが深くなる。どんぐりまつりの遊びのコーナーを決める際には、教科書に載っていない、前年度に体験した遊びを提案する姿もあり、体験が生かされている。

<幼小連携・接続の視点>

教職員で下見をする際に、「幼児にはこんな姿が見られそうだ。」「1年生はこんな姿だろう。」と、それぞれの育ちを伝えながら、実際の場で活動を考えることによって、それぞれの姿に合った配慮が明確となった。事前打ち合わせを行い、幼児・児童理解を共に行うことの重要性を改めて感じた。

また、小学校の教師は、幼児が教師の指示によって、スムーズに並んだり話を聞いたりする姿、集団で活動する姿、代表の幼児が感想を発表する姿等を見ることによって、5歳児の育ちを理解することができた。幼稚園の教師は、生活科での教育内容や指導方法を知るとともに、この時期の1年生の発達の様子や卒園した児童のその後の育ちを知ることができた。

(2) 事例2 給食おいしかったね！

○ 5歳児のねらい

小学校の雰囲気を感じながら給食を味わい、就学を期待する。

○ 5年生のねらい

幼児と関わることで、自分たちより幼い相手にやさしく接する態度を養う。また、1年生として入学してくる幼児と親しくなることで、最高学年としての責任感を育む。

[活動設定の理由]

本園では、毎日お弁当持参である。幼児は、親子共に「給食を食べられるだろうか?」「どんなものなのだろうか?」と不安を感じる姿も多い。小学生と同じ給食を食べることで給食への不安を軽減させたいと考え、幼稚園から依頼して給食体験を毎年実施している。

5年生は、幼児が入学時に最高学年となる学年であり、入学後に関わりが多いことを考慮して5年生との会食とした。

[実践]

○ 5年生と給食体験

クラスの幼児が、5年生3クラスに分かれて体験する。児童の1グループに1人から2人の幼児が入る。テーブルクロスや箸セットの置き方など、幼児にとっては初めての作業なので支度にとまどっていると、5年生が一つ一つ丁寧に教えたり、うまく理解ができない様子の幼児には手伝ったりする姿がある。給食を配膳する姿を、幼児は興味深く見ている。

準備ができ、「いただきます」の合図ですぐに食べ始める幼児もいれば、なかなか食べ始められない幼児もいる。5年生が「嫌いな?無理なくて大丈夫だよ。」「おかわりする?」など声を掛けてくれたり、牛乳パックの片付け方を教えてくれたりする。また、幼児をリラックスさせようと、楽しい話題を提供する姿もある。

幼児は、給食を体験することで「全部食べられた」と自信をもったり「少し牛乳飲めた。」と不安を軽減したり「アジフライ美味しかった」と新たな発見をする姿が見られた。さらに「牛乳は嫌いだけど、次も飲めるかも」「少しだったら飲むよ」と苦手な牛乳に対しても前向きな言葉もでていた。

小学生と同じ体験ができた嬉しさや自信から、「アジフライ美味しかったから、お弁当に入れて!」と母に頼むなど、給食体験を家庭に伝える幼児もいた。

○ 事例2に対する評価

<ねらいや内容の妥当性について>

実際に教室で小学生と給食を食べる体験をして、給食の流れや時間を体感でき、雰囲気を味わえたことで、それまでの給食への不安が減少している様子が見られ、十分にねらいを達成していると言える。

児童は、それぞれの幼児の様子に合わせて必要な関わりや手助けをしており、優しく接していた。各々が楽しそうに幼児と関わっている様子から、仕事としてだけではなく、関わりを心から楽しんで行っていることが伺えた。児童が幼

児の姿から思いを察し、言葉を掛けたり手助けしたりしていることを教師が認めることで、自分が幼児の役に立っているという気持ちをもつことができる。さらに、幼児が入学した後もお世話をしようと思えるきっかけともなる。

<家庭との連携>

幼稚園の保護者は、給食を我が子が食べられるのか、また、食べられたとしてもどの程度食べられるかなどの心配が尽きない。そこで、当日の様子を具体的に伝え、小学校入学にあたっての、食に関する課題や今後経験しておくべきことを家庭で考える機会をもつように図った。給食体験後には、お弁当の栄養や食感などを見直して改善したり、子供の楽しかった思いを再現するためにメニューを工夫したりした家庭もあった。

(3) 事例3 幼小連携・接続に向けての幼稚園・学校の取組

[実践]小学校における授業参観

○ねらい

- ・入学当初の児童の様子や教育内容を理解する。
- ・児童の個々の育ちや課題について、考察する。

○取組

6月に、近隣の幼稚園や保育所等の教師や保育士が1年生の授業を参観する。

○参観後の協議

参観後、児童が下校し、小学校の担任と、参加した幼稚園や保育所の教師等で話し合いの時間をもつ。小学校の担任が、入学からこれまでの1年生の様子を伝え、幼稚園や保育所の教師等は、参観しての感想を伝える。また、全体会の後、現担任と元担任で、個々の児童についての情報交換を行う。

○事例3に対する評価

幼稚園の教師は、入学後数か月経った時期の児童の姿を参観することにより、卒園児が、小学校での生活の変化にどれだけ適応できているか、幼稚園で身に付けた力がどのように活かされているか等を見届けることができる。

また、小学校の生活や指導の方法などの実態を知ることによって、小学校の生活に適応できるような指導や配慮について考え、特に就学を控えた時期の指導を再確認し、指導計画を見直す機会となる。

小学校の教師は、幼稚園の元担任と話し合うことで児童の様子や発達が理解できたり、配慮事項や保護者との連携のヒントが得られたりする。

参観後の協議では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、参観のポイントを設定するなどして、より具体的に接続期の教育を教職員で考えることが必要である。

4 評価を踏まえた改善に向けて

(交流活動等改善に向けて配慮する事項)

- ・「どんぐりまつり」や「給食体験」での幼児の姿や活動を通しての学びを、園内の反省に留めず、小学校の先生方に伝えて、共通理解を図る。

- ・ 幼児にとって、就学を期待する大きな機会となっていることや、交流することで意識や行動が育つ大切な場面であること、保護者にも大きな刺激となっていること等をしっかりと小学校に伝え、毎年実施できるよう働きかけ、カリキュラムに位置付ける。

（接続を踏まえた指導計画の改善の視点）

- ・ 幼稚園の教師は幼児の交流の場における姿について把握しているが、小学校は低学年の担任を中心に交流活動を行うので、他学年の教師は幼稚園等における幼児の姿や保育を実際に見ていないことが多い。そのため、次の1学年担任にも分かりやすいよう、書面等での記録の残し方にも配慮する必要がある。また、ねらいや内容を再考し、次年度の指導計画の改善を行い、実践につなぐようにすることが必要である。
- ・ 交流活動等の実践後、事後の反省等年度末まで持ち越してしまったり書面で簡素化してしまったりすることもある。互いに気付いたことを伝え合うことで、次年度のよりよいプランが考えられるので、振り返りやカリキュラムの見直しの時間を年間計画に位置付けておくことが重要である。

5 まとめ（連携から接続へ）

本園でも、小学校との交流活動が位置付けられ、教員の交流も増え、互いの教育について考える機会も増えてきている。しかし、教育の接続、学びの連続性について考える場はまだ少ないことが実状である。

子供の学びをつなぐためには、保育参観や授業参観を通じて、教師同士がお互いの教育内容等について相互に理解できるよう研修をするなどして、小学校側は、児童の学びの履歴を知り、幼稚園側は、幼児の未来像を知ること、双方の指導に生かしていくことが必要である。

そこで、今後、以下のような具体的な取組を進められるよう計画している

- ①入学当初の授業や給食、そうじの様子を幼稚園教諭が参観する。
- ②幼稚園側が気になった場面を記録し、その児童の様子が、幼稚園時代のどのような指導の延長線上にあるか考察する。
- ③②で考察したものをまとめ、小学校と意見交換する。
- ④入学当初に見られた児童の行動について、幼稚園でどのような経験がもととなっているか、また幼稚園での経験と小学校での学習や生活にどのように影響しているかを整理する。その際には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭において進めていく。
- ⑤幼稚園側は、小学校での生活や学習を意識した幼稚園での保育内容や環境構成のポイントを、小学校側は、幼稚園での経験を踏まえた学校での指導の配慮事項等について、具体的にまとめる。そしてまとめたものを蓄積し、学校、幼稚園の他学年の教職員に広めていく。

以上のような取組を丁寧に行うことにより、幼小の円滑な接続を推進していく。